

史跡出雲玉作跡

—宮ノ上地区

—第1次発掘調査概報—



1984

玉湯町教育委員会

はじめに

玉湯町は名湯玉造温泉を擁する街として大へん有名ですが、古代出雲における玉類の一大生産地としてもよく知られております。

町内には多数の玉作り遺跡が分布し、このうち3カ所は「出雲玉作跡」として、大正11年に国史跡の指定を受けました。その1つ、宮垣地区は全面調査のあと、昭和49年に出雲玉作史跡公園として整備され、町内外の皆さんに広く利用され、親しまれています。

一方、宮ノ上地区では指定以来、発掘を伴う調査はなく、遺物や遺構を埋蔵する範囲やその性格が今一つ明確であります。そこで、今後の保存・管理上必要な資料を得るため、玉ノ宮地区も含めて昭和58年度より年次的に調査を実施することになったものです。

今回の調査では本概報にありますように、古代の玉作り資料や多量の土器類が検出され、一定の成果を挙げることができました。

調査にあたり、ご指導・ご協力を賜りました文化庁、島根県教育委員会、調査指導委員会の先生方、地元の地権者の方々に心からお礼申し上げます。

昭和59年3月

島根県八束郡玉湯町教育委員会

教育長 仲 義 弘

例　　言

1. 本書は玉湯町教育委員会が昭和58年度に国庫および県費の補助を得て実施した史跡出雲玉作跡(宮ノ上地区)の第1次発掘調査の概報である。
2. 調査は昭和58年4月15日から9月23日まで断続的に実施し、その後若干の補足調査を行った。
3. 町内に国指定の玉作り跡が3カ所存在するが、各地域内の代表的な字名をもつて地区名とした。宮ノ上地区のほか、宮垣地区(現出雲玉作史跡公園)と玉の宮地区がある。
4. 調査体制は次のとおりである。(敬称略)

調査指導者　文化庁　伊藤稔(記念物課文化財主任調査官)
島根県教育委員会　長谷川清(文化課管理係長)、勝部昭(同埋蔵文化財係長)、卜部吉博(同主事)、西尾克己(同主事)、鳥谷芳雄(同主事)
調査指導委員会　山本清(島根大学名誉教授)、寺村光晴(和洋女子大学教授)、渡辺貞幸(島根大学助教授)、前島己基(奈良国立博物館主任研究官)

調査員　　勝部衛(玉湯町教育委員会)

調査補助員　笠谷昭治(京都産業大学)、川島明人(東海大学)、足立幸子(出雲玉作資料館)

調査事務局　仲義弘(玉湯町教育長)、森脇幸好(主任主事)、小西賢治(社教主事)

5. 調査にあたり、地権者の玉作湯神社(遠藤融宮司)、仲田満雄、長谷川正司、青砥清の各氏に多大なご協力を得た。

6. 本書の作成は島根県教育委員会の指導を得て、勝部衛が行った。図版作成には足立幸子氏の協力を得た。

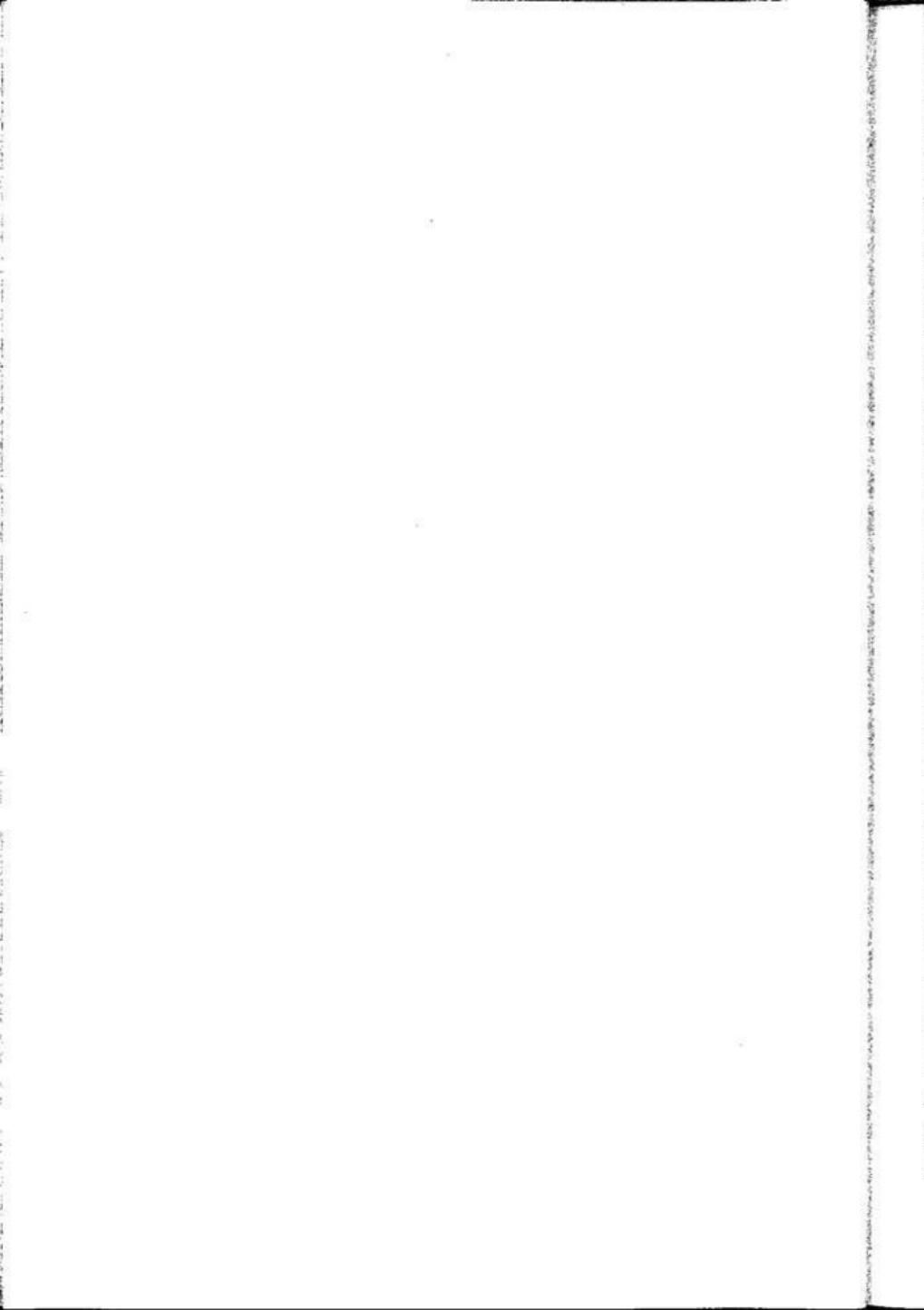
目 次

はじめに	
例 言	
I 調査に至るまでの経過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	6
1. 調査の経過	6
2. 遺 構	7
3. 遺 物	11
IV まとめ	20

(表紙は本遺跡出土の碧玉製勾玉未成品、実大)



第1図 玉湯町の位置



I 調査に至るまでの経過

出雲における古代玉作り遺跡の存在は、『古語拾遺』(807年)、『延喜式』(927年)等の古文献から推定されてはいたが、それを裏付ける考古資料の発見と収集は明治維新を迎えたあとのことであった。明治18年以降は、資料の散逸を憂えた玉作湯神社の宮司が、遺物発見の都度、同神社へ奉納せしめたとされている。⁽¹⁾

中央学会への紹介はやや遅れて明治33年を嚆矢とする。花仙山のめのう調査に訪れた東京学士会院の田中芳男が、玉作湯神社に保管されていた砥石を偶然目にし、そのうち3個を東京帝国大学人類学教室にもち込んだのが発端である。これが同教室の八木燁三郎の注目するところとなり、八木は明治33年5月10日付けの『時事新報』に「曲玉砥石の新発見」と題して所見を発表したのである。以後、多数の学者の注目を集め、昭和2年には、それまでの玉作り研究の集大成ともいわれる『出雲上代玉作遺物の研究』が京都帝国大学文学部より刊行された。

一方、大正8年史跡名勝天然記念物保存法が制定され、同9年から指定が始まった。玉造地内でも、玉作湯神社宮司より大正10年指定願いが提出され、翌11年神社に関連する、宮ノ上地区、宮垣地区、玉ノ宮地区の3カ所が「出雲玉作跡」として国指定の史跡となった。

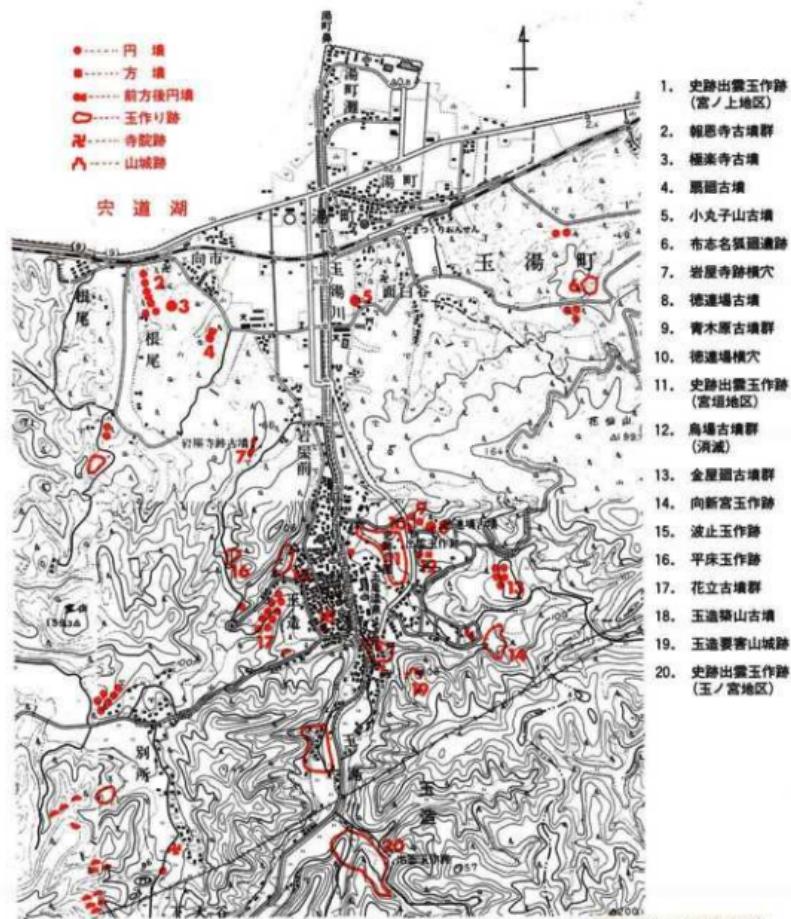
昭和14年には村内から発見され、玉作湯神社に収蔵されていた古代玉作りに関する資料が国宝（昭和25年法律改正により重要文化財）に指定され、その後昭和33年には追加指定された。指定総数は346点余（玉類184点、砥石類162点、古代ガラス片若干）に上る。

昭和43年には、史跡出雲玉作跡（宮垣地区）を含む玉造温泉街東側丘陵一帯の土地地区画整理事業が着手され、宮垣地区を史跡公園化し、保存・活用を進めることになった。公費による土地買上げ後の昭和44年と46年、3次にわたる発掘調査が実施された。その成果に基づいて設計された出雲玉作史跡公園は昭和49年にオープンし、現在に至っている。

また、他の2カ所の指定地（宮ノ上地区、玉の宮地区）についても指定が古く、遺跡の範囲や性格が今一つ不明確なところから、今後の保存管理上の資料を得る目的で、年次的に発掘調査を実施することになったものである。今回はその初年度に当たる。

Ⅱ 位置と歴史的環境

位置 宍道湖の南岸には低くなだらかな丘陵が湖岸までせまり、その山ひだを縫って多数の小河川が湖に注いでいる。大東町境の葦山に源を発する全長約10.8キロメートルの玉湯川もその一つで、大谷から玉造へと狭い谷あいを北流し、河口の湯町付近に至ってわずかな沖積地を形成する。



第2図 史跡出雲玉作跡（宮ノ上地区）の位置と付近の主要遺跡 (S = / : 2万5千)

史跡出雲玉作跡（宮ノ上地区）は玉材産出地花仙山周辺の玉作り遺跡群の一つである。玉湯川を河口から約2.5キロメートルさか上った右岸に位置する。玉造温泉街でやや広がっていた谷はこの付近を境に急に狭くなる。遺跡の背後には標高約108メートルの山城跡玉造要害山が屹立している。

宮ノ上地区は八束郡玉湯町大字玉造508番地ほか18筆の地籍からなっている。総面積は約8,780平方メートルである。全体の地形は要害山から派生した支丘から川沿いの低地まで数段の階段状をなしている。自然地形が残っている所もあるが、多かれ少なかれ人為的な改変を受けていると考えられる。指定地の中心は玉作湯神社境内で、宮司宅を含め全面積の3分の2以上を占める。本殿裏山が最も高く、標高約50メートルを測る。上段には本殿や拝殿、中段には収藏庫、下段には宮司宅や社務所などの建物がある。さらに低い川沿いの低地には古くからの民家が軒を連ねている。標高は21メートル前後で、現在の玉湯川水面から約1.5メートルの比高である。

歴史的環境 弥生時代以前に属する遺跡は数少ない。それもわずかな土器片が採集されているだけで詳細は不明である。縄文式土器を出土した鳥場遺跡⁽²⁾、弥生式土器を出土した小丸山遺跡、向畠遺跡⁽³⁾が知られている。

古墳時代に入ると玉作り遺跡を中心に多くの遺跡が展開する。周知のとおり、玉材産出地花仙山をひかえた玉湯川流域には周辺も含めて10カ所の玉作り遺跡が立地する。このうち、昭和44年と46年に実施された史跡出雲玉作跡（宮垣地区、現史跡公園）の調査では約30棟の玉作り工房跡や数万点にのぼる玉作り関係資料が検出さ



図版第1 史跡出雲玉作跡（宮ノ上地区）付近の航空写真
(S 58. 2月撮影)

れ、古墳時代前
期末葉から平安
時代にかけて玉
作りが行われた
ことが確認され
⁽⁴⁾
た。また昭和54
年発見された布
⁽⁵⁾
志名狐廻遺跡は
6世紀後半代にめ
のう製勾玉を主
に生産した玉作
り遺跡であった。

玉作り遺跡に対し、玉湯川流域には多数の古墳も分布し、総数約60基が知られている。これらは、中・下流域の玉造、湯町の両地区に集中する。まず玉造地区では2～8基を単位とした径10メートル前後の小円墳群が、玉作り遺跡を取り囲むように周辺の丘陵上に営まれている。これらの古墳の年代的位置付けはいま一つ明確さを欠くが、古式の舟形石棺を内部主体とする徳連場古墳や築山古墳は中期的な様相を備え、この地区では最も古い。その後、立地、形状、群集形態などから、後期の特徴をもつ青木原、金屋廻、花立、高尾などの古墳群が築造されている。花立第5号墳では玉造5例目の舟形石棺が見つかっている。横穴も数カ所に存在し、寄棟平入り構造をもつものが多い。特に国指定史跡の岩屋寺跡横穴群は山陰でも最も整美な例の1つとしてあげられよう。

わずかな沖積地の広がる湯町付近には玉作り遺跡は見当らず、古墳の築造数も少ない。しかしその反面、規模の比較的大きな古墳が、小平野を見下す丘陵縁辺部に独立して築かれていることが多い。玉湯川左岸の報恩寺古墳群第4号墳や扇廻古墳⁽⁶⁾はいずれも前方後円墳で流域最大の全長約50メートルを測る。ともに未発掘であるが、古墳の形状やそのあり方は中期的様相を示す。また円墳最大の径約34メートルを誇る極楽寺古墳⁽⁷⁾も隣接して存在する。右岸には円墳第2位の径約18メートルの小丸子山古墳が築かれている。

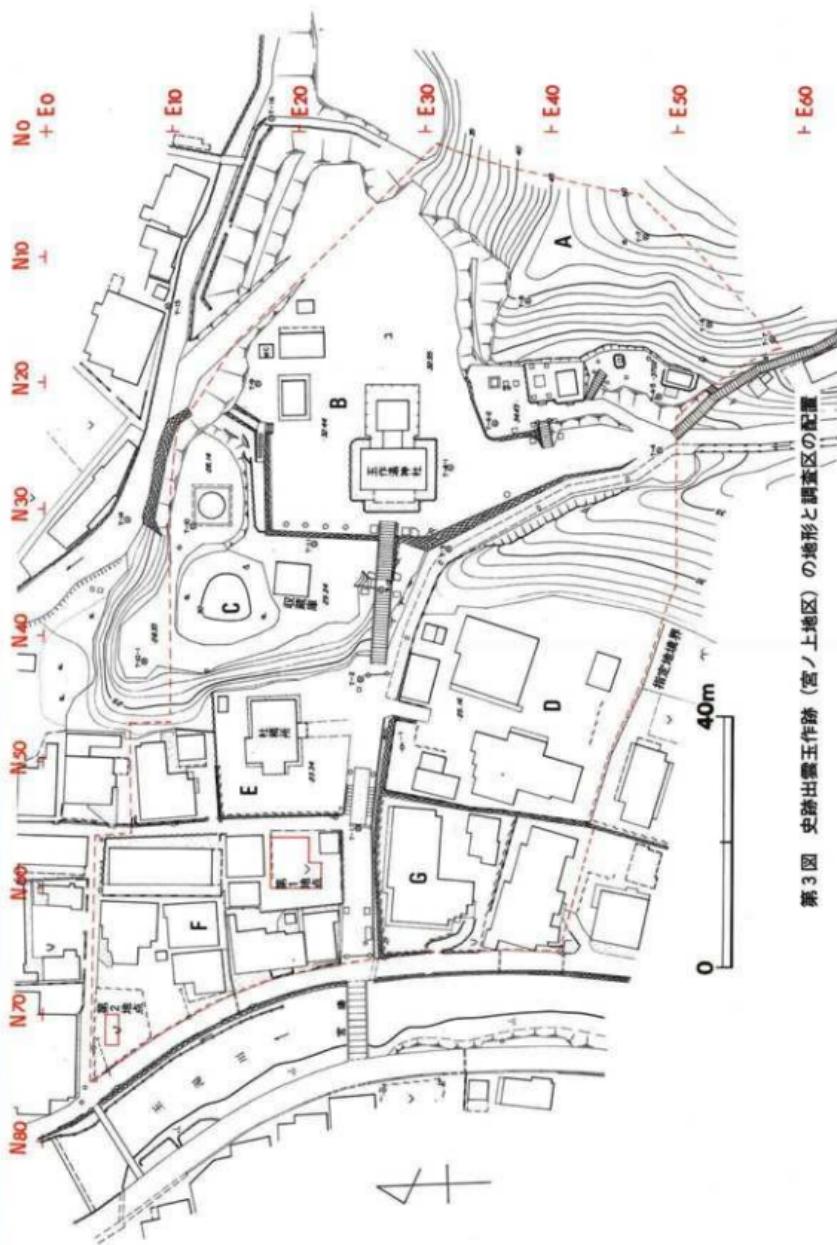
以上のように玉湯川流域の中・下流では古墳のあり方に多少の相異はあるが、前方後円墳を含め、円墳系の古墳が大部分を占める。方墳と考えられるのは鳥場古墳群⁽⁸⁾のわずか2基のみである。これは隣接する意宇川下流平野を中心とする地域で方系墳が盛行するのと比べて興味深い。また玉湯川流域の古墳の規模や築造数は、狹小な地域の農業生産力に不相応で、玉作りの実施と深くかかわりをもつものと考えざるを得ない。

奈良時代になると、玉湯川流域は、花仙山周辺の玉作り遺跡群を形成していた忌部川流域とともに忌部神戸に設定されている。これは前代の玉生産と密接な関連をもって行われたとする考え方強い。

史跡出雲玉作跡(宮ノ上地区)の中心である玉作湯神社はすでに『出雲國風土記』(733年)にその名が登場する。式内社でもあり、『古語拾遺』に出雲玉作りの祖とされる櫛明玉命を祭神の1柱とする。境内およびその周辺ではこれまでにも多数の玉類未成品や砥石等が採集されている。玉類未成品では碧玉製の勾玉・管玉11点、水晶製の丸玉・平玉・管玉5点、「大丸玉」1点がある。砥石類では筋砥石が6点、平砥石1点、内磨砥石2点、「錐磨」砥石1点がある。境内収蔵庫裏には1基の円墳もある。

→ E60

第3図 史跡出雲工作站（宮ノ上地区）の地形と調査区の配置



III 調査の概要

1. 調査の経過

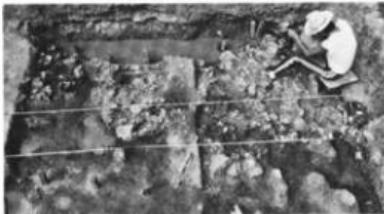
調査の便宜上、指定地全域を地形等によりA～Gの7地区に分けた(第3図)。また社務所南側に基準点を設け、全域をNラインとEラインにより2メートル方眼に区画した。Nラインは地形に合わせて設定し(N4°E)、Eラインはそれに直交する。Nラインは東から西へ順次ナンバーを付し、Eラインも北から南へ同様とした。各方眼の名称はその方眼の北東隅で交わるそれぞれのラインの名称をとり、例えばN56 E 21などとした。

調査の目的は遺跡の範囲とその性格を明確にすることにあり、対象地に適切な間隔でグリッドまたはトレンチを設定し、土層の状況や遺物包含層の有無を確認することが基本的な作業となる。指定地内には住宅地を含み、調査が実施できる地域は玉作湯神社境内や畠等の空地に限られる。

昭和58年度はF地区第1地点と第2地点(第3図)の調査を終了した。並行してE地区社務所周辺での調査を行ったが完了するまでに至らず、次年度に継続することとした。調査は58年4月15日に着手し、9月23日にはほぼ終了した。調査日数は延べ73日である。

F地区第1地点は畠地である。第3層の下面で近世以降の遺構を確認し、地山直上の4-d層で古墳時代初頭を主体とする保存良好な遺物を検出した。遺物には多量の土器や玉類未成品がある。第2地点は玉湯川の川沿いにある。砂層等から川水に洗われた形跡もあり、遺構は検出できず、遺物も陶磁器片若干が出土したにすぎなかった。第1地点は排水が悪く、雨後は調査区が水没することもたびたびで、調査遅滞の原因となった。

E地区の社務所周辺もF地区とほぼ並行して調査を進めた。社務所西側ではF地区第1地点から連続する遺物包含層を確認したが、種々の事情で完掘できず、調査の詳細は次年度の成果にあわせて報告することにした。



図版第2 F地区第1地点での調査風景

2. 遺構

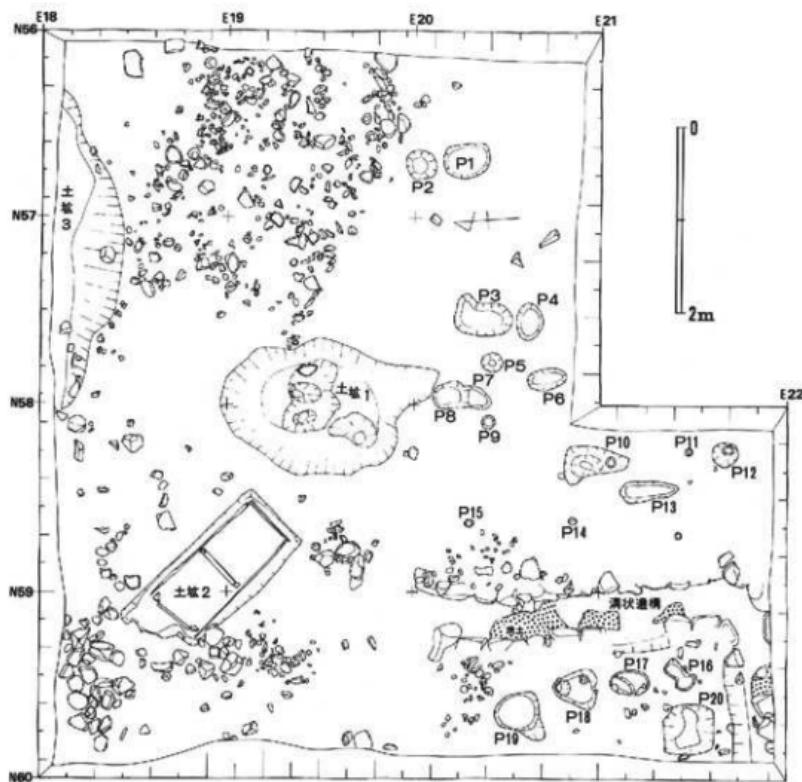
(1) F 地区第1地点

玉作湯神社社務所敷地に小道を狭んで西接する。地籍は玉造506—2で地目は畠である。同じ敷地内にかってのめのう原石倉庫やめのう細工製品倉、貸屋(現在空屋)が建っている。ほぼ平坦地で標高は約22.3メートルを測り、周囲の道路などより30センチから1メートル高くなっている。調査面積は約56平方メートルである。

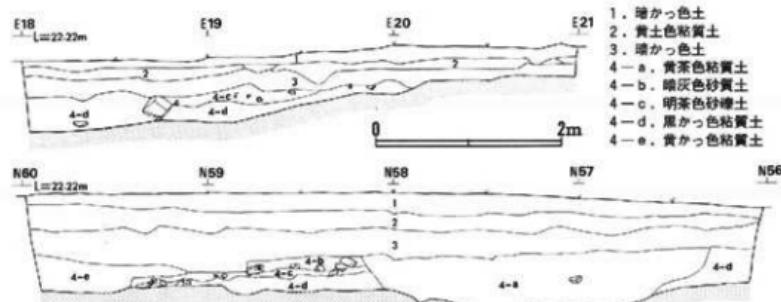
基本層序は現耕作土である1層から地山に達するまではほぼ4層を数える。地山は黄茶色粘質土で全体的に北西へゆるやかに傾斜している。2層は黄土色粘質土で、部分的に不明瞭な所もあった。3層は第1層と類似した暗かっ色土層である。ここまででは調査区全域にほぼ同じ厚さで堆積していた。4層は調査区北半分からのみ検出され、a～cに区分できた。このうち4—C層は砂礫層で幅と方向性をもち、4—d層の一部をえぐって堆積している。4—d層は黒かっ色土でやや粘質をおび、およそN56 E 20とN59 E 18を結ぶラインの北側に5～40センチの厚さで堆積する。遺構の検出面は第3層下面で、E 20ラインから南では地山上面、北側では4層上面にあたる。溝状遺構、土塹、ピットなどがある。遺構面の平均的な標高は約22メートルで玉湯川の現水面から約2メートルの比高がある。



図版第3 F地区第1地点近景(東より)



第4図 F地区第1地点造構実測図



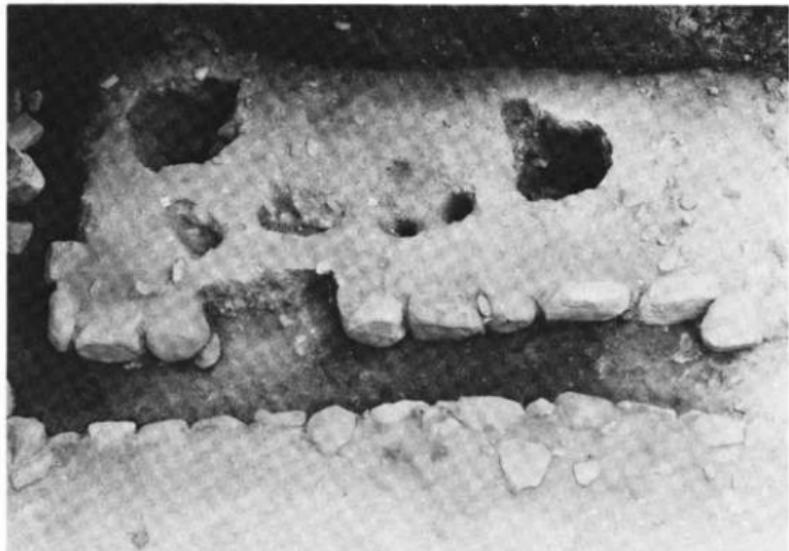
第5図 N56ライン（E18～21）（上図）およびE18ライン（N56～60）（下図）断面実測図

溝状遺構（図版第4） ほぼ南北方向に走るが、E22ラインの手前で西へほぼ直角に折れ曲がる。E20ライン付近かや北側は破壊され、西側へはさらに続くと思われる。検出した溝の総延長は約6メートル、幅は約40センチ、深さは約20センチを測る。溝の両側には人頭大の石が1段並置されている。一部石が抜き取られた所や溝内に崩落した部分も見られる。底部は平坦で、傾斜もほとんどなく、水流の方向も不詳である。溝内の覆土は炭化物を多量に含み、黒灰色を呈している。さらにスサ入りの焼土が落ち込んでいた。

土塙 土塙は3基検出された。土塙1は長径約1.9メートル、短径約1.4メートルの不整橢円形を呈す。土塙内にはさらに4個のピットが見られ、最も深いもので検出面からの深さは約60センチである。覆土には多量の炭化物を含んでいた。

土塙2（図版第5）はほぼ長方形プランを呈し、内法で約1.6×1.4メートル、深さ約0.6メートルを測る。長軸の方向はほぼ東南方向を示す。底面から約0.3メートルの高さまでは4周に板で2段にわたりワク組みがなされている。4隅と中央付近に杭が打たれ、板の崩落を防いでいる。板と土塙の間には粘土を充てんする。底面はほぼ平坦で、すでに地山に達している。

土塙3（図版第6）はその一部を検出したに過ぎない。平面形は円弧状を呈す。



図版第4 溝状遺構（東より）

弦の長さは約3.4メートルを測る。壁面は傾斜し、床面の高さは一様でない。深さは約40~60センチで4-d層を貫いて地山に達している。覆土は単一な土層で地山の黄茶色粘質土に類似し、4-d層と思われる黒かっ色土をブロック状に含んでいる。断面は第5図断面図の4-a層にあたる。

ピット ピットは大小20穴検出された。深さ10センチ前後の浅いものが多いが、30~50センチに達するものが3穴(P10、19、20)見られる。古式土師器や陶器などの遺物を伴うピット(P1、2、4、20)も存在する。P19の底面にはほぼ同面積の白色の板状の凝灰岩が残置されていた。

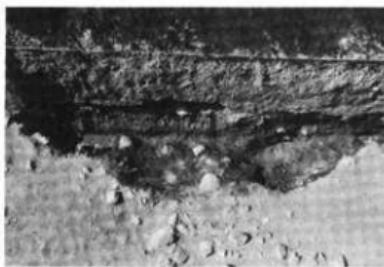
その他 調査区の東北部を幅約2メートルで、東南東から西北西へ調査区を横切る礫群が見られる。人頭大から拳大の円礫と粗砂からなる。断面図(第5図)では4-C層にあたる。人為的なものではなく、水流により運ばれ堆積したものと考えられる。

(2) F地区第2地点

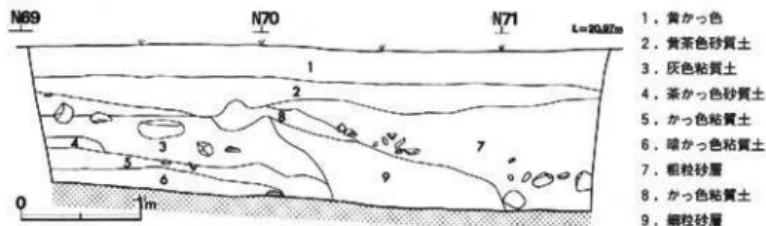
宮ノ上地区西北端に位置し、玉湯川に接する。地籍は玉造503、地目は畠である。標高は約20.9メートルで、現玉湯川からの比高は1.5メートルを測る。5×2メートルのトレーナーを設定し、約1.4メートルの深さで地山に達した。砂質分の多い地域で特にN70ラインから川寄りは地山まで、親指大から拳大の円礫を多数含む粗砂層(第



図版第5 土塙2



図版第6 土塙3



第6図 Eライン(N69~)断面実測図

7層) や礫を含まない細砂層(第9層)が堆積していた。遺構に類するものは検出できなかった。

3. 遺物

(1) F地区第1地点

a. 出土状況

遺物は大別して、遺構に伴うものと土層に包含されるものがある。第3層下面で検出された遺構からは概して共伴する遺物は少ない。それに比して、土層に包含された遺物は多量である。

溝状遺構からの出土遺物は、若干の陶磁器片、ほうろく状の素焼土器片、糸切底を有する土師質皿、古式土師器片、陶磁器片、碧玉・水晶片、寛永通宝1点がある。このうち溝底からは陶器片、ほうろく状素焼土器片の一部、焼土内から磁器片、土師質皿が出土している。

土塙1の覆土内からは若干の陶磁器片、古式土師器片、碧玉・水晶剝片が出土している。土塙最上部からは鉄製の紡錘車や炭化木片が見つかっている。

土塙2は比較的の遺物が多い。陶磁器類、いぶし瓦片、針金などが覆土内から出土し、底面からは白磁製の電気絶縁用パイプ、小型のそろばんのワク板が検出された。その他、古式土師器片や碧玉・水晶の剝片が若干ある。

土塙3は他の遺構と多少様相が異なる。古式土師器片、有孔円板未成品(碧玉製1、滑石製2、結晶片岩製1)、碧玉製管玉未成品1、水晶・碧玉剝片を出土した。これらはブロック状に含まれる黒かっ色土に伴うことが多かった。しかし、同じ覆土内から陶磁器片3片が出土している。

次に土層内の遺物出土状況に触れる。1層には陶磁器片とともに碧玉やめのうの



図版第7 3層銅印出土状況



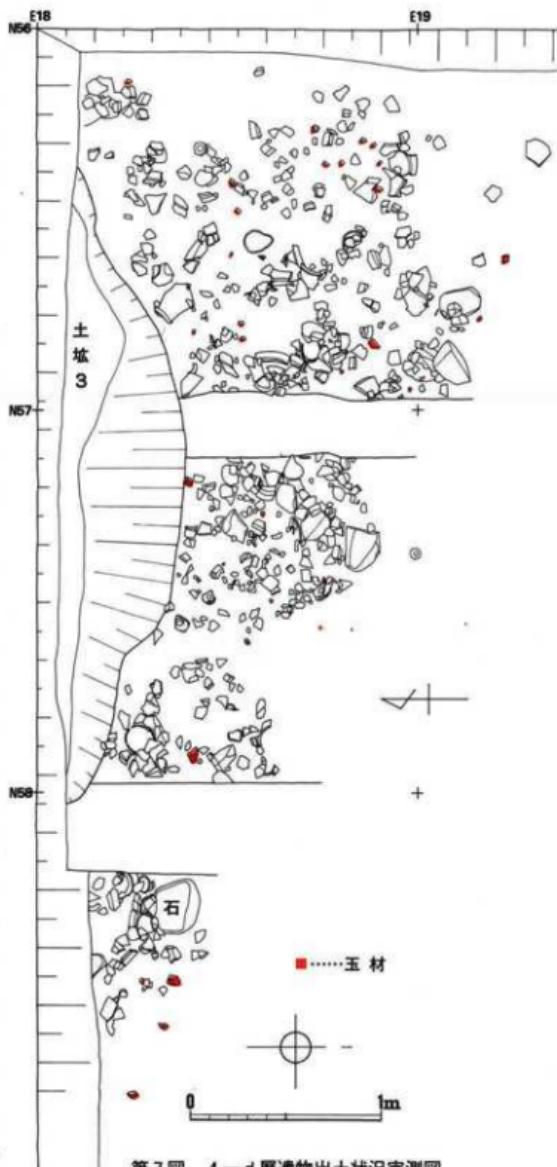
図版第8 4-C層内磨石出土状況

剝片が多数含まれていた。付近にめのう原石倉やめのう細工場があったことと関連すると思われる。2層はきわ立て遺物の出土が少なく、若干の土師器片や陶磁器片が出土した。

3層からは多量の古式土師器片が出土した。

3層出土遺物の大部分を占める。小片が多いが、口縁～頸部まで完全に復するものも含まれている。その他、少量の須恵器、陶磁器片、ガラス器も出土している。玉材も多數存在し、碧玉が最も多く、水晶、めのうがつづく。明らかな未成品もあり、形割りや研磨工程の碧玉管玉未成品も数点出土している。また銅印の一部と考えられる破片も1点検出されている。

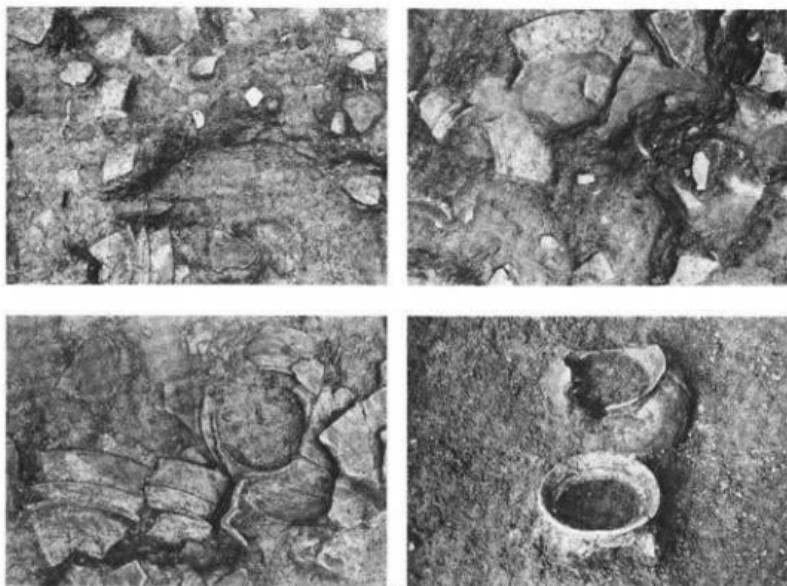
4-C層は礫の間からかなりの量の土器片や玉材が出土している。最も多いのはやはり古式土師器で、若干の須



第7図 4-d層遺物出土状況実測図



圖版第9 4—d層遺物出土狀況（遠景）



圖版第10 4—d層遺物出土狀況（近景）

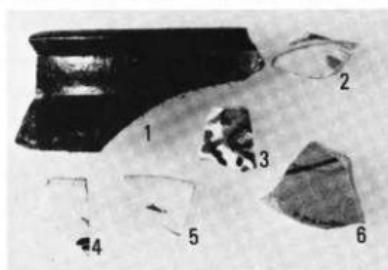
恵器、土師質土器、陶磁器類も含まれる。須恵器は山陰須恵器編年のⅢ期に属するものが多いが、なかには系切底を有し、高台をもつ杯片もある。玉材は碧玉が最も多く、水晶やめのうはわずかである。拳大から細片まで大きさは様々である。明確な未成品として、碧玉製管玉、同勾玉、水晶製勾玉、同丸玉などの形割、研磨、穿孔工程の資料がある。

4-d層は調査区の北東側に厚く堆積するが、遺物もその範囲に分布する。多数の土器等がまとまって出土した。古式土師器が大部分で、わずかに弥生系の土器を含む。須恵器など他の土器や陶磁器は全く検出されなかった。古式土師器は総量が50個体を越え、壺・甕類、器台、高杯、低脚杯、注口土器などの器種を含む。完形に近いものも含めて、形のわかる土器がまとまって出土することが多い。保存も良好で、文様や調整手法がよく看取される。弥生系の土器は比較的小片で、甕類、器台の破片がある。

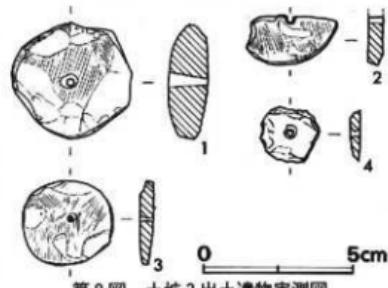
玉材には碧玉約70点、水晶50点、石英2点があり、黒耀石片3点も出土した。めのうは全く検出されず注意される点である。このうち明確な未成品としては碧玉製勾玉、同管玉、水晶製品(玉種不詳)が数点出土した。その他石器として、小型磨製石斧1点、打製石包丁様石器1点、黒耀石製石鎌1点がある。

b. 遺物の概要

各遺構出土の陶磁器 (図版第11) 1
は溝状遺構床面から出土した小型の甕の破片である。内外面とも鐵釉が施され、内面に1種のたたき目が残る。唐津系か。



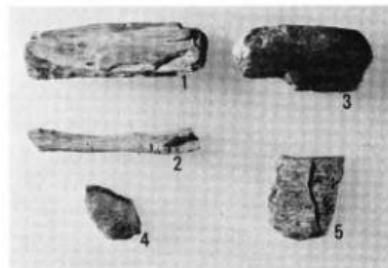
図版第11 各遺構出土陶磁器



第8図 土塙3出土遺物実測図



第9図 3層出土銅印拓影 (実大)



図版第12 4-C層出土内磨砥石

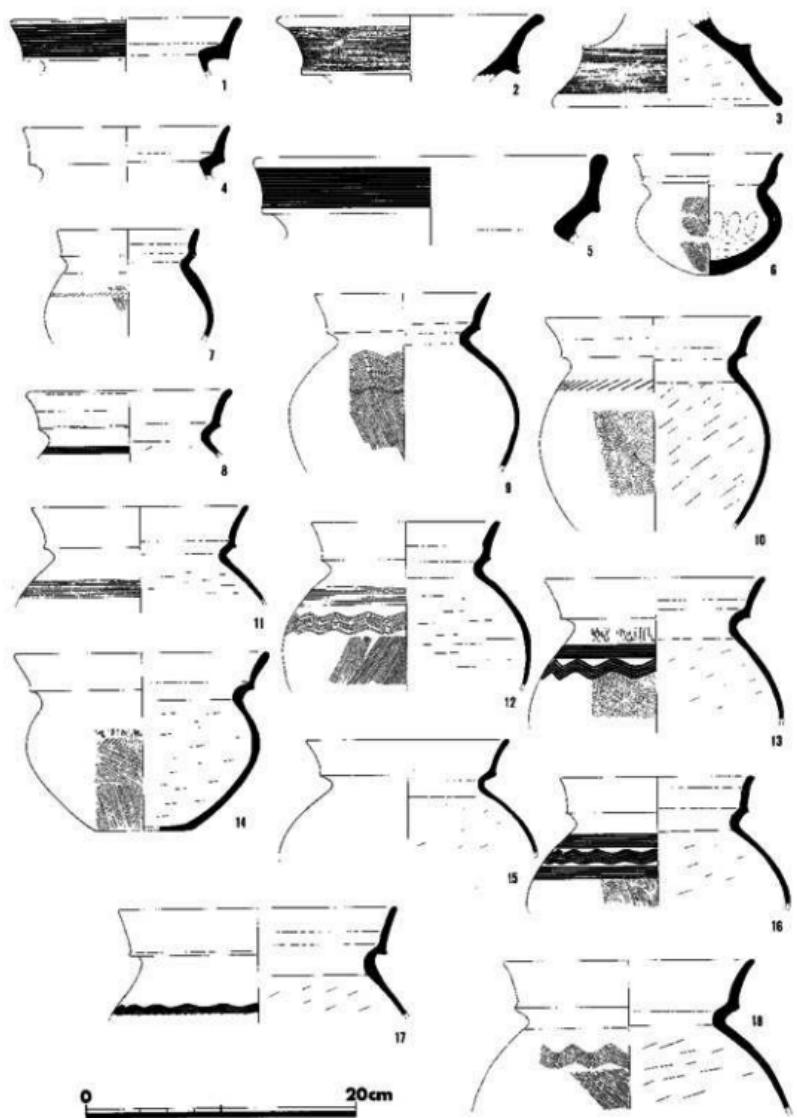
2は土塙1より出土した灰色の磁器で染付けがなされるが、発色が悪く、青灰色をなす。伊万里系。3、4は土塙2の出土。3は染付け。竜文と考えられ、鮮やかなブルーを呈す。4は陶器で白化粧を施しあげ絵を描く。5、6は土塙3からの出土。5は染付け。焼成不良で発色が悪い。地方窯の製品と思われる。6は陶器。さび絵で唐津系の技法を有す。

土塙3出土の遺物（第8図） 中央に1孔を有する有孔円板である。1は碧玉製だが、淡緑色でやや軟質。荒い研磨が両面と周縁部に及び、穿孔は1方から行われている。有孔円板としては通例よりやや厚く、紡錘車の可能性も残る。2、3はいわゆる滑石製である。2は全体の約半分を欠失するが、復元推定径は約3センチ、厚さは約0.5センチを測る。3は完形品で長径約3.3センチ、短径で約2.7センチ、厚さ約0.5センチを測る。孔は2に比べてやや細い。2、3とも両面と周縁に荒い研磨痕が残り、穿孔は両面からなされたものと考えられる。4は内磨砥石によく使用される結晶片岩製である。滑石製品より小型で、長径約2センチ、短径約1.7センチ、厚さ0.4センチを測る。研磨は行われておらず、両面からの穿孔が施されている。

3層出土の銅印（第9図） 鎔銅印の破片と考えられる。淡緑色を呈す。残存部分はヨコ2.4センチ、タテ1.3センチ、厚さ0.45センチを測る。陽刻された文字1字が部分的に残っている。文字の厚さは約0.2センチを測る。押印した場合の最初の文字である。裏面は周辺がやや高いが、ほぼ平坦である。鋲は欠失している。

4—C層出土の内磨砥石（図版第12） 木化石製（1、2）と結晶片岩製（3～5）がある。1は長さ約10センチ、幅約3.1センチ、厚さ約1.6センチを測る。片側の側縁に使用痕が残り、両面も使用された可能性がある。2は両側縁がよく使い込まれている。面の部分も使われた可能性がある。3～5も面や縁に使用痕が残る。3は通常よりやや厚く約2.1センチ、他は0.5センチを測る。4、5は破片であろう。

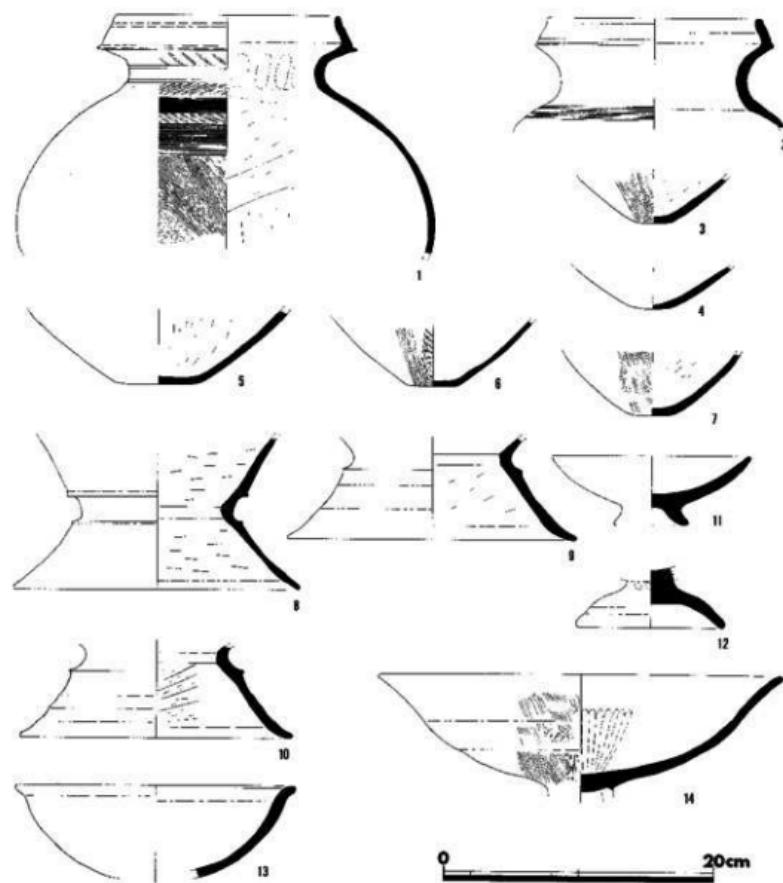
4—d層出土の土器（第10、11図） 少数の弥生系の土器（第10図1～5）がある。1、4、5は甕の口縁部で、いずれも複合口縁をなす。1は口縁外面にクシ状工具による平行沈線を施し、頸部内面が鋭角的に折れ曲がる。口縁内面はヘラ磨き、頸部以下内面はヘラ削りを施す。4は1と相似した断面を示すが、口縁部外面に平行沈線がなく、内外ともていねいなヘラ磨きをなす。頸部内面も同様にヘラ磨きを施す。5は4と同様クシ状工具による平行沈線を施すが、口縁端部が肥厚し、鈍重な作りになっている。2、3はいわゆる鼓形器台の受部（2）と脚部（3）と考えられる。胎土が異なり同一個体ではない。両者とも外面にクシ状工具による平行沈線



第10図 4-d層出土土器実測図 (1)

を施す。2の内面はヘラ磨き、3の内面はヘラ削りを施す。以上の弥生系の土器は褐色を呈し、器壁が比較的厚く、がっしりした印象を与える。

第10図5～18は古式土師器の甕類で、口縁の径で3種類ほどに分けられる。小型品で11センチ前後、中型品で15センチ前後、大型品で20センチ前後を測る。これらはほぼ共通した形態と調整手法を示す。口縁は複合口縁で、口唇はゆるやかに外反する。体部は卵形で、肩があまり張らず、最大径はほぼ中位付近にある。色調が明るく、全体に薄い器壁をもつ。底部（第11図3～7）は直径2.5～6センチほどの不



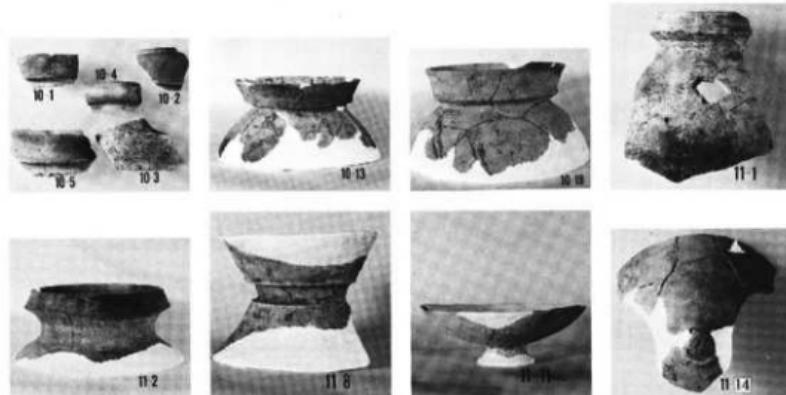
第11図 4-d層出土土器実測図（2）

安定な平底を残す。口縁外面には文様はなく、肩部に施されるのが通例である。クシまたはハケ状工具により平行沈線、波状文が単独または組み合わせて施文されることが多い。中には第10図7、10のようにヘラ状工具やクシ状工具による「ノ」字状の刺突を施す例もある。口縁部は内外ともヨコナデ、体部外面はハケ目調整、内面頸部以下はヘラ削りを施す。第10図6は小型で、例外的に器壁が厚い。体部内面に指頭圧痕が残り、外面はハケ目調整のあと、軽くヘラ磨きがなされている。第10図14は甕というよりは鉢状を呈する。器高が低く、比較的大きな平底をなす。

第11図1、2は壺に類する形態を示す。頸部がやや長く、口径に比べて大きく胴部が張り出す。口縁も内傾し、端部は角ばっている。1は特に装飾が多く、頸部から肩部にかけて、クシ状工具による刺突文と平行沈線をくり返す。口縁部内外はヨコナデ、胴部外面はハケ目調整、頸部以下内面はヘラ削りを施す。頸部内面には指頭圧痕が残る。口径は約16.4センチを測る。2は1に比べて頸が長く、装飾が少ない。肩部にクシ状工具による平行沈線が見られる。その他の形状や調整法は1とはほぼ同様である。口径は15.8センチを測る。

器台（第11図8～10）はいわゆる鼓形器台で、筒部が太く短かく、受部・脚部とも大きく外反する。8は調整法不詳だが、他は受部・脚部とも外面ヨコナデを施す。受部内面は9は筒部を含めてヘラ磨き、10はていねいなヘラ削りをなす。脚部内面はヘラ削りを行うが、脚端部はヨコナデされている。脚端部の径は21～22センチを測る。

低脚杯（第10図11、12）は形状に2種ある。11は杯部が浅く、ゆるやかに内湾す

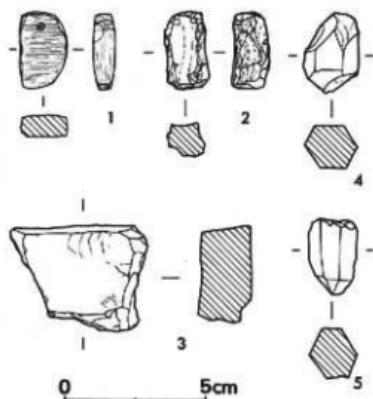


図版第13 4-d 層出土土器（番号は図面番号に同じ）

る。口縁内外ともヨコナデ、杯部外面はハケ目調整後ヨコナデ、脚部もヨコナデを行う。杯部内面はていねいなヘラ削りを行った後にヘラ磨きの痕跡がある。杯部の口径14.8センチ、高さ5.1センチ、脚端部径5.5センチを測る。12は脚部のみで杯部を欠く。内外ともヨコナデで、外面杯部との境目に指頭圧痕が残る。

高杯（第10図13、14）と考えられる土器にも2種ある。13は浅い杯部もち大型品である。口径約30センチを測る。ゆるやかに内湾し、端部付近でやや外反する。外面に粘土のつなぎ目が2カ所観察され、それぞれの段で調整法を異にする。全体をハケ目調整したあと、上段はヨコナデ、中段はヘラ磨きを行い、下段はそのままである。内面は口縁部でヨコ方向のヘラ磨き、それ以下は底部へ向ってタテ方向に暗文風のヘラ磨きを施す。14は13に比べて小型。器形は口径に比べて深い。内湾度も強く、口縁端で大きく外反する。口径約20.8センチを測る。口縁部は内外ともヨコナデをし、そのほかはすべてヘラ磨きが施されている。

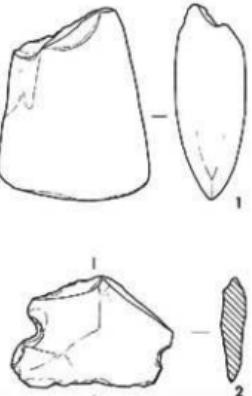
4-d層出土の玉類（第12図）1は碧玉製勾玉未成品である。長さ約2.7センチ、幅約1.7センチ、厚さ約0.7センチを測る。腹部を除いて全体に荒い研磨を施し、一方向からの穿孔を終えている。2は碧玉製の管玉未成品である。長さ約2.7センチ、幅は約1.4センチを測る。ほぼ四角柱状をなし、細かな調整の剥離が行われている。3は碧玉である。板状をなし、荒削り段階の未成品と思われる。4、5はいずれも水晶材で六角柱の結晶体の、5は基部のみを、4は基部と先端部の両者を打ち欠く。製作予定の玉の種類は不明だが荒削



第12図 4-d層出土玉類未成品実測図



図版第14 4-d層出土玉類



第13図 4-d層出土石器実測図

り段階の未成品であろう。

4-d層出土の石器（第13図） 1は珪岩質の小型磨製石斧で、基部を欠失する。現存長は長さ約7.1センチ、刃部での幅約5.6センチ、厚さ約2.6センチを測る。刃部は鉈刃状を示し、図の左側部分が特によく磨耗している。2は打製の石包丁様の石器で安山岩質である。両サイドにえぐり込みが見られる。幅約6センチ、高さ約3.8センチ、厚さ約0.8センチを測る。

(2) F地区第2地点

第2地点からは陶磁器片若干が検出されている。いずれも各層から断片的に出土したもので、まとまった資料はない。

IV まとめ

今回の調査で最も重要な点は、F地区第1地点における4-d層の検出にあることは言待たない。ここでは紙数に限りもあり、4-d層を中心に若干の私見を混え、まとめとしたい。

F地区第1地点の層序 遺構の検出された3層下面以上と4層以下に大きく分けられる。3層下面で検出された遺構は前後関係はあるがいずれも近世以降の所産であり、3層以上は明らかにその後形成されたと考えられる。3層は古式土師器が多いが、須恵器や陶磁器なども含む。本層出土の銅印の所属年代については書体も含めた形式学的な検討を待たねばならない。

4層以下についても、4-d層以外は3層と同じような状況にある。古式土師器を主体とするものの、須恵器、陶磁器などをわずかながら含んでいる。遺構の営まれた時期前後に2次的に堆積したものであろう。

4-d層と出土遺物 一方4-d層は他の土層とは趣を異にし、ゆるやかに北西に傾斜する地山の直上に堆積する。この中には多量の土器や玉類未成品が含まれていた。土器は少数の弥生系の土器を除くと大部分が古式土師器で、そのほか時期を異なる土器類は検出されなかった。土器の保存も良好で、出土状況を見ても、自然の営力により移動堆積したとは考えにくい状況にあった。第1次的な層と考えたい。

この一群の古式土師器のうち甕類は先述したように形態、調整手法などに共通点⁰⁷をもち時期を同じくするものと考えられる。藤田憲司氏の編年に従えば、山陰Ⅳ期の範ちゅうに含まれる。平底が不安定ながら残る点、肩部に文様がひんぱんに施さ

れる点などから、このうちでもやや古い様相をもっと判断される。他の壺、高杯、低脚杯、器台それに玉類未成品も少量の弥生系土器よりも古式土師器に伴うと考える方が妥当性がある。他遺跡での共伴関係を見ても大きな矛盾はない。弥生系の土器については第10図-5の壺は山陰Ⅲ期に、同一2、3は明らかに九重系の器台であり、1も同時期と考えられる。4も調整手法や形態から1に近いといえよう。

玉材は碧玉と水晶を中心とし、めのうが全く検出されなかった点が注目される。今後、この時期の玉作り遺跡を調査する際注意されるべきことであろう。

総括 4-d層の検出が今回の調査の焦点であった。今までのところ、この地域が花仙山周辺玉作り遺跡群では最も古い玉作り跡となった。また当該時期の土器がまとまって出土した例は島根県内では稀であり、編年を確立する上で好資料を提供することになった。2次調査では4-d層の広がりを明確にすることが1つの課題であり、また付近には玉作り関係の遺構の存在も推定され、その検出も期待される。

註

1. 浜田耕作編『出雲上代玉作遺物の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第10冊) 昭和2年
2. 玉湯町教育委員会『玉造鳥坊遺跡群』昭和45年
3. 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館『八雲立つ風土記の丘研究紀要I—弥生式土器集成』昭和52年
4. 玉湯町教育委員会『史跡出雲玉作跡発掘調査概報』昭和47年
5. 勝部衛「布志名孤廻遺跡」(『島根県埋蔵文化財調査報告』第10集) 昭和56年
6. 玉湯町『玉湯町史』上巻、昭和36年
7. 註6と同じ
8. 内田律雄、原田律夫、勝部衛、松本岩雄「玉造花立5号墳について」(『山陰史談』15)昭和54年
9. 註6と同じ
10. 玉湯町教育委員会『玉造の史跡ガイド』昭和58年
11. 註6と同じ
12. 原田律夫「出雲の大型円墳について」(『季刊文化財』38号)昭和55年
13. 註2と同じ
14. 『玉湯町史』上巻61~79ページ「上代出雲玉工作出土品明細書」および261ページの同補遺の「神社境内」、「神社境外」、「神社付近」、「神社馬場」、「神社裏山」、「神社荒神森」、「宮司の庭」、「宮ノ上」、「湯ノ端」、「宮ノ後」、「神湯」、出土の資料を集計した。

15. 山陰と山陽との土器の併行関係を検討された藤田氏の説に従っておきたい（藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」（『考古学雑誌』64—4）昭和53年）。
16. 島根県立博物館主任学芸員村上勇氏のご教示による。
17. 註15の論文に同じ
18. 例えば櫛塚遺跡第1号、第2号貯蔵穴出土土器があげられる（倉吉市教育委員会『櫛塚遺跡発掘調査報告書』昭和53年）。

史跡出雲玉作跡 一宮ノ上地区

—第1次発掘調査概報—

昭和59年3月31日発行

編集・発行 玉湯町教育委員会

島根県八束郡玉湯町大字湯町1793

印 刷 株式会社報光社

島根県平田市平田町993